COP通信

Comprehensive Oncology Program

第3号 2013.4

東北大学病院がんセンター
先進包括的がん医療推進室

URL：http://www.hosp.tohoku.ac.jp/cc/cop/cop.html

このロゴマークはデザイナーの許可を得て使用しております

活動報告

「厚生労働省平成24年度チーム医療普及推進事業」による「がん薬物療法地域連携チーム医療」ワークショップ

仙台市、石巻市、大崎市を会場に3回にわたり開催してきた「チーム医療ワークショップ」ですが、大好評のうちに幕を閉じました。前号では仙台会場の様子をお届けいたしましたが、今号では石巻、大崎会場の様子をレポートします!!

平成25年1月26日 in石巻

ファーマライズ薬局
石巻店　大森　史子

小雪舞う1月下旬、石巻グランドホテルで開催された、第2回「がん薬物治療地域連携チーム医療」ワークショップin石巻に参加させていただきました。

今回も様々な職種の医療関係者が集まり、薬物療法についてのショートレクチャーや石巻の医療スタッフによる症例検討会、小グループに分かれてのディスカッション等などで活発な意見交換が行われました。

ディスカッションでは、1症例の模擬がん患者様に対して退院が可能かどうか、退院にあたっての問題点などに対して、どのように対応していくかなどを話し合いました。自分の職種だけでは、解決できそうにないような問題点も多々あり、事前にこの症例を見たときには、患者様の希望を叶えることは難しいと思っていました。しかし当日、他職種の方から様々なアプローチ方法の意見が飛び交い、話し合っていくなかで、叶えることができるのではないかと思うようになり、チーム医療の重要性、すばらしさを改めて痛感しました。また、このディスカッションは4グループに分かれて行いましたが、各グループで取り上げた問題点や今後の薬物療法などの方針が異なったことも、大変興味深い結果でした。

震災後、石巻をはじめとする沿岸地域では、仮設住宅暮らしの患者様など様々な課題が存在します。この課題に立ち向かうためにも地域医療連携は大変重要だと思います。今回このワークショップに参加させていただき、同じ地域の他職種の方々と交流をもつ貴重な機会を得ることができたことに感謝いたします。

平成25年2月23日 in大崎

ニチイケアセンター
古川訪問看護ステーション　菅原　圭子

「患者は、相談支援センターに行けば何でも解決してくれる」と思って病院の相談室に足を運んでくるのです。だから相談室は、可能な限り」広いスペースを確保し、出入り口の扉はだれでも自由に出入 ができるように常にオープンにしてあるのです。と相談員の方から聞いたことがありました。

今回、機会をいただき「がん薬物療法地域連携チーム医療」のワークショップに参加させていただきました。以前に緩和ケアに携わっている相談員の方から聞いた言葉を思い出しながら、専門家による講話や参加者との症例検討会に臨みました。

患者さんは長い期間がん治療を受けていく間に、心の状態や日常の問題点などもその時点ごとに変わっていくので、もっと大きな視野で患者をとらえていく必要があることや、がん診療連携拠点病院では入院期間が短く、患者は準備もできないままに退院を迫られることもある現実を改めて認識する場となりました。

今後は在宅医療を充実させるためにも地域連携クリティカルパスの整備をしっかりと行っていくことの重要性や、がん診療連携拠点病院主催のワークショップを医療者対象というだけでなく、多くの関係する職種へ門戸を広げていられればと感じました。

地域医療に携わる者として常に情報収集のアンテナを張り巡らせ、役割と使命が果たせられるように精進していきたいと思います。

心のお届け便 Vol.2

～COP通信はがん患者さんの心の声をお届けいたします～

“協力”することで自らの治療に参加しませんか？

ペンネーム　いずみ　かんろう
仙台市泉区　泉 閑老

やがて死亡原因の半数が何らかの「がん」になると聞いています。私も2011年大学病院移植再建内視鏡外科で食道がんの再建手術を受け、翌12年晩秋から同病院腫瘍内科に入院、放射線治療と化学療法を受け、4月で抗がん剤投与も第6クール目に入ろうとしています。

さて、私はこの入院生活で、大きな感銘を受けました。大勢の先生方がプロジェクト（医師団）を組み、各個患者の緻密な情報を共有し、短期間に最大の治療効果を上げるため始終鳩首会議（失礼）で検討を重ねていること。そして、朝夕、病床に回診に来られる医師団の先生方が、各個人の病に関する最新の情報を「共有」していることまでは知りませんでした。情報を緻密に知っているのは担当医だけではなかったのです。また、医師と患者の間には接着剤として正確な活動をしてくれる看護師さんが、「伝達・連携」という大きな役割を果たしています。

医師団の「この患者を治そう」という想いに、患者として私たちは応えているでしょうか。「治すのは先生。私はただ寝てりゃいい。」ではないのです。病を治すには、医師からの説明を理解しそれをしっかり受け止め共有し、「早く治るために私に出来ることは何か」を考え協力しなければなりません。

～患者として、早期治療に役立つ実行可能なことは以下の点だと考えます～

・医師に症状を正確に訴えること
・医師の診断説明、病んでいる機能の役割と病状を聞き十分理解すること
・今後の治療計画や治療方法の選択に納得し協力すること

「病状と治療方法の共有」、「医師と看護師を含む医事従事者と患者の治そうとする意欲との連携」、「患者の持てる〝一緒に治そうというエネルギー（自己治癒力）〟で治療に協力」。この3点を毛利元就の「三本の矢」に準えて私たち患者も自らの治療に参加しませんか。

イベント情報

第2～4回　がん医療講演会

■時間　18:30～20:00
■対象者：医療・保健・福祉関係者
■参加費無料／申込み不要

栗原圏域

■会場：エポカ21（くりこま高原駅すぐ）

第2回／2013年6月6日
「ストマケア」
みやぎ県南中核病院長　内藤広郎先生
大崎市民病院　細谷裕子先生（WOCN）

第3回／2013年9月5日
「精神的ケア」
東北薬科大学病院 精神科部長　三浦伸義先生

第4回／2014年1月16日
「がん相談・がん情報提供」
東北大学病院がんセンター
先進包括的がん医療推進室　中山康子さん

登米圏域

■会場：ホテルニューグランヴィア（登米市役所徒歩5分）

第2回／2013年7月5日
「精神的ケア」
東北薬科大学病院 精神科部長　三浦伸義先生

第3回／2013年10月4日
「支持療法・セルフケア」
石巻赤十字病院 腫瘍内科部長　大堀久詔先生

第4回／2014年2月7日
「がん相談・がん情報提供」
宮城県立がんセンター
相談支援センター　松田芳美先生(CNS)

編集後記

COP通信をご覧いただき、誠にありがとうございます。

皆様からのご指導とご協力のおかげをもちまして、当推進室が活動を開始してから1年がたち、あっという間に活動期間の折り返し地点を迎えました。

当推進室のスタッフは、医師・看護師・保健師・社会福祉士・秘書といった様々な職種、20代～60代と幅広い年代、また女性の割合が全体の83.3%を占めるという状況において、スタッフ全員が協力して活動できていることが、推進室の強みになっていると実感しております。

COP通信も第3号となり、残り3回の発行となりますが、スタッフ一同さらに手と手を取り合い、協力し合って、活動をバージョンアップさせていくとともに、皆様に愛されるCOP通信を作成してまいりますので、どうぞご期待ください!!　（保健師　真溪淳子）

編集委員
熊坂夏菜子（MSW）　真溪淳子（保健師）
小幡泉（CRC）　平塚明子（事務補佐）

【発行元】
東北大学病院がんセンター
先進包括的がん医療推進室
〒980-8574 宮城県仙台市青葉区星陵町1-1
Tel: 022-717-8885（直通）／ Fax: 022-717-8886
E-mail: cancercenter@hosp.tohoku.ac.jp

COP通信はみなさまからのご意見やご要望をお待ちしています。

第１回栗原圏域がん医療講演会

平成25年2月7日（木）　エポカ２１

《講師》　大崎市民病院　外科系診療部長　　今野 文博 先生
　　東北大学病院　医学系研究科教授　　宮下 光令 先生

講演会の報告

宮城県北部保健福祉事務所
栗原地域事務所（栗原保健所）　　新澤　緑

平成２５年２月７日、栗原市のエポカ２１において東北大学病院がんセンター先進包括的がん医療推進室主催の『第１回栗原圏域がん医療講演会』が開催され、保健・医療・福祉関係者８８名が参加しました。

今回は『緩和ケア』をテーマにお二人に御講演いただきました。大崎市民病院の今野文博先生からは「皆さんにもできます！緩和医療」と題して、大崎市民病院における緩和ケアチームの活動、疼痛緩和等についてお話しいただきました。東北大学大学院医学系研究科の宮下光令教授からは「看取りのケアを考える」と題して、看取りまでの心身の状況と本人・家族へのケア、最新の研究成果等についてお話しいただきました。具体的な方法や資料、実際の症例等が現場での取り組みに活かせると好評でした。

この講演会は、専門家からがん医療に関する知識をわかりやすく学べる、専門機関とのつながりを深められるよい機会であると思います。

近年、当保健所では関係機関と共に、緩和ケアの取り組みの一環として、誤嚥性肺炎予防（口腔ケア）を在宅・病院・施設を問わず地域全体で行うことや在宅ケアのチームづくりの推進を目的に、研修会の開催、施設への専門スタッフ派遣、地域の従事者による啓発用リーフレットの作成等を行ってきましたが、栗原圏域がん医療講演会は平成２５年度も開催予定と伺っていますので、今後も参加し、保健所で行うがん患者・家族地域支援推進連絡会議や研修会等の対策に活かしていきたいと思います。

第１回登米圏域がん医療講演会

平成25年3月8日（金）　ホテルニューグランヴィア

《講師》　石巻赤十字病院　緩和医療科部長　　日下 潔 先生

講演会の報告

登米市民病院
地域医療連携室　室長補佐　　高橋　孝規

3月8日、登米市迫町を会場に、東北大学病院がんセンター先進包括的がん医療推進室主催の第１回登米圏域がん医療講演会が開催されました。

これは、県内のがん医療体制を充実するための様々な取り組みの一貫として開かれたもので、講師の石巻赤十字病院緩和医療科部長の日下潔先生から、「緩和ケア」をテーマにご講演をいただきました。

日下先生からは、これまで長年がん医療の最先端でご活躍されてきた経験を基に、緩和ケアの在り方や宮城県内の在宅看取りの現状、石巻地区で整備された在宅ケア連絡会の事例などもご紹介いただきました。

中でも特に印象に残っているのは、「人は必ず死にます。」と話した後に、日下先生が会場に投げかけた「あなたはがんで死にたいですか。」という質問でした。会場でその問いに手を挙げたのは２人だけ、もちろん私も手を挙げませんでした。

しかし、日下先生は、「私ならがんで死にたい。なぜなら…」と続けました。その話を聞いて、私の「がんで死ぬこと」に対する考え方は全く違うものになっていました。

この講演会では、今後の取り組みに役立つ沢山の宝物を拾うことができました。もちろん、日下先生の「なぜなら…」もその一つ。

私は、またこの企画に参加し、もっと多くの宝を拾いに来たいと思いますので、是非みなさんもご一緒にいかがでしょうか。

好評連載！

おしえて！おばたさん！！

臨床試験てなんだろう？？

第3回　臨床試験に関する規制

がんセンター　臨床研究コーディネーター　小幡　泉

「臨床試験」というと「人体実験では？」と言われることがあります。

確かにその昔「医学の進歩のため」という大義名分のもと、倫理的に問題のある研究が日本を含む世界中で行われていました。

現在の日本では「個々の被験者の福祉が他のすべての利益よりも優先されなければならない」（ヘルシンキ宣言※1より）とされ、倫理的に守られた研究が行われています。

倫理的・科学的な臨床試験（研究）が行われるようチェックしているのは、病院長と倫理委員会です。開始前に必ず審査を受け、承認を得なければなりませんが、開始後も1年に1回状況報告が必要です。また重篤な有害事象※2が発生したらそれも報告が必要です。その上で臨床試験の継続に問題がないか倫理委員会で審査されます。

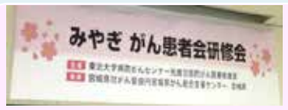
この審査の規準となるのが「臨床研究に関する倫理指針」※3です。指針ではその他にインフォームドコンセントに必要な事項が定められており、試験参加した場合のデメリットも被験者（候補）に隠さず伝えることになっています。

この他にも最近では利益相反委員会が大学病院等で設置され、臨床試験（研究）の審査を行っています。こちらの委員会で審査するのは公正性についてです。

最近では産学連携が進み、企業より資金提供を受けることがありますが、「研究費を提供してくれる製薬会社に有利にデータ改ざんするのでは？」との疑念が起こる場合があります。利益相反委員会では透明性が確保されているか、公正・適正に試験が行われる体制か審査されます。

現在規制に対し罰則はありませんが、不遵守かつ改善がない場合は厚労省からの資金提供打ち切り等の措置がホームページで明示されています。

※1世界医師会の宣言のひとつで、「人間を対象とする医学研究の倫理的原則」です。
　日本は1951年に世界医師会に加盟しました。
※2有害事象：医薬品を投与された被験者に生じたあらゆる好ましくない医療上のできごとで、必ずしも医薬品との因果関係が明らかなもののみを示すものではありません。
※3この他に「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針」など、細分化された指針がいくつか厚労省より通知されています。



みやぎ　がん患者会研修会2013　開催報告

平成25年3月16日（土）仙台市シルバーセンター

春の気配が感じられるようになった3月16日、「つながることから始めよう」をテーマに、みやぎ　がん患者会研修会2013を開催いたしました。

当日は、宮城県内から55名のがんの患者さんとご家族、また医療関係者にご参加いただきました。

講演では、名古屋を拠点として地域密着のがんサポート活動に取り組んでおられるNPO法人ミーネットの理事長 花井美紀先生をお呼びして、『広がる「がんのピアサポート」～仲間(ピア)による支援の必要性と意義～』についてご講演いただきました。花井先生からは、ピアサポートの目的と役割、ヘルパーセラピーの原則等についてお話しいただき、最後に「がんの体験者が仲間を助けようとする行動をとることで、互いに感情を分かち合い、癒され助けられる。ピアサポートによって、がん体験者として、人としての育ちにつながるのである」とお話しいただきました。

続けて、本推進室の看護師　吉田久美子さんは、自らのがん体験を発表し、「がんという病を受け止め、自分にとっての病の意味を見つけ出して、新たな一歩を踏み出すことが大切である」と研修会に参加者の皆さんに語りかけました。

参加者の方々からは、「講演、体験発表ともに大変充実した内容でした。自分がやれることを模索していきたいです」「がんの患者として話し合い、希望を互いに与え合える場は必要だと感じました」等の感想がいただきました。

ご参加いただきました皆様、どうもありがとうございました。